

Millennium Villages Project

ミレニアム・ビレッジ・プロジェクト

ミレニアム・プロミス・ジャパン 理事長
鈴木 りえこ
Rieko Suzuki

2010年9月、菅直人総理大臣は国連ミレニアム開発目標(MDGs)サミットにおいて、保健、教育部門で最大85億ドルの拠出(菅コミットメント)を約束し、関係者の注目を浴びた。だが、今年6月2~3日に東京で開かれたフォローアップ会議中には内閣不信任案が提出されるという政治的混乱があり、残念ながら会議場に潘基文国連事務総長の姿もなかった。

しかし、21世紀初頭における国際社会全体の環境改善への誓いを守るといふ努力は続けていかなければならない。

筆者は、この論文においてMDGs達成へのアプローチを国際社会に示すために設立されたミレニアム・ビレッジ・プロジェクト(MVP)のコンセプトと手法、プロジェクトの現状、最後にミレニアム・プロミス・ジャパン(MPJ)の活動と今後の展望について簡潔に述べたい。

1 「ミレニアム・ビレッジ・プロジェクト」とは

MDGsの達成期限まで残すところ5年となった昨秋、ニューヨークの国際連合本部で開催されたMDGsサミットの開会宣言において、潘基文事務

総長は以下のような主旨の挨拶を述べた。

「みなさん、…MDGsは達成可能です。…私はアフリカ諸国を訪問し、マラウイのムワンダマのミ

レニアム・ビレッジで、ベナンのソングアイ村で、改革・組織化されたプロジェクトと、そして、それを実現する関係者たちの努力と信念を自分自身の目で確かめてきました。」¹

潘事務総長が、上記において言及したマラウイのムワンダマ村は、アフリカにあるミレニアム・ビレッジ(MVs)の一つである。MVsは「ミレニアム・ビレッジ・プロジェクト(MVP)」²が運営している所謂開発モデル村群であり、2004年8月に設立されたケニアのサウリ村が第一号である。



ミレニアム・ビレッジ、ムボラ村(タンザニア)の見事な収穫

主旨

MVPは、ジェフリー・サックス教授(現コロンビア大学地球研究所長、国連事務総長のMDGs担当特別顧問)が、アナン前事務総長の依頼により、プロジェクト・チームを形成しコンセプトを提示した「ミレニアム・プロジェクト(MP)」を改称したものである。その主旨は、MDGs達成が可能であること、そのための手法をモデルとして世界に提示することである。

手法

- MVPの目的を達成するための手法は、
- ①不利な地理的状況と極端な貧困が結びついて世界最悪の貧困の罠が生じている³アフリカの遠隔地の村の中から対象を厳選する。
 - ②上記に先端的な知識と技術を含んだ実証済みの介入による限定的支援を行う。
 - ③目標期限内に全力を挙げてMDGsを達成する。
 - ④プロジェクト終了後の継続的な成長基盤を作る、などである。

このプロジェクトでは、すべての資源をMVs内に集約し、農村と都市部の間のインフラ構築や地域内の制度改革等を優先対象として、大規模な投資を行っている。

具体的には、1日1ドル未満で暮らす人々が集中しているサハラ砂漠以南のアフリカ10カ国(エチオピア、ガーナ、ケニア、マラウイ、マリ、ナイジェリア、ルワンダ、セネガル、タンザニア、ウガンダ)における14クラスター、約80の村々(それぞれ約5000人規模)を人工的にMVsとして設定し、5年~10年という期限付きで、すでに実証済みの手段を用いた介入を総括的に行うものである。

介入する分野は、1)農業、2)基本的な健康、3)教育、4)電力・輸送・通信、5)安全な飲料水と衛生設備、という必要な領域のほとんどを網羅していることが特徴である。貧困の原因はすべての問題が複雑に関係しあうため、特定分野だけに力を注入しても絶対的な貧困は無くならない、と考えるからである。

MPJユースのメンバーとマヤンゲ村の子どもたち(ルワンダ)



例を挙げると、

- ①コミュニティの大半を占める農民の自立を促し、改良種子や肥料を提供。
 - ②経済成長を妨げているマラリアの抑止策として殺虫剤処理済の蚊帳を全戸へ配布。
 - ③病院やクリニックがほとんど存在しない地域において、クリニック等の建設。
 - ④教育と栄養改善のための学校給食プログラムの促進。
 - ⑤携帯電話を使ったコミュニティ・ヘルス・ワーカーによる村人の健康管理。
 - ⑥農業協同組合を設立し、マイクロクレジットなどを導入して、換金作物を生産する。
- などである。

現在、50万人がその対象となり、恩恵を受けている。

最近では、MVPは、村人の自給達成後も持続可能な成長を遂げるため、農業改革による換金作物の生産や、農民を起業家に転身させるための農業関連ビジネスの開発に力を注いでいる。

村人一人当たりの予算

MVsは5年単位の期限内に、村人一人あたり平均して年間110ドル、さらに運営費として一人あたり年間10ドル、合計120ドルが必要であると計算している。そのうち、MVPが60ドル、国及び地方政府が30ドル、パートナー団体が20ドルを支援、さらに村人自身も10ドルを寄与することが目標とされている。

使途の内訳としては、約30%が保健、20%がイ

主要なミレニアム・ビレッジ

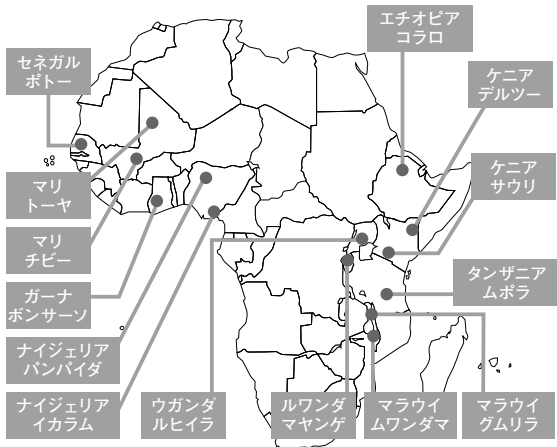


表1

国籍	サイト	ビレッジ数	出資元	開始時間
エチオピア	コラロ	11	EI ⁽¹⁾ /MP ⁽²⁾	2005年2月
ケニア	サウリ	11	EI/MP	2004年8月
	デルツ	1	UNHSTF ⁽³⁾	2006年6月
ガーナ	ボンサーソ	6	UNHSTF/MP	2006年6月
	ウワンダマ	7	UNHSTF/MP	2006年6月
マラウイ	グムリラ	1	MP	2006年10月
	チビー	11	UNHSTF/MP	2006年6月
マリ	トーヤ	1	MP	2008年1月
	イカラム	4	UNHSTF/MP	2006年6月
ナイジェリア	パンバイダ	3	UNHSTF/MP	2006年6月
	マヤンゲ	4	EI/MP	2006年6月
セネガル	ポトー	6	UNHSTF/MP	2006年6月
タンザニア	ムボラ	6	UNHSTF/MP	2006年6月
	ルヒーラ	8	UNHSTF/MP	2006年6月
ウガンダ	ルヒーラ	8	UNHSTF/MP	2006年6月
	合計	80		

1) EI: Earth Institute at Columbia University (コロンビア大学地球研究所)
 2) MP: Millennium Promise (ミレニアム・プロミス)
 3) UNHSTF: UN Human Security Trust Fund (日本政府からの援助対象)

表2 フェーズ1介入方法のタイムライン

農業	1	2	3	4	5
種子と肥料の支援	■	■	■	■	■
公開講座トレーニングと記憶	■	■	■	■	■
作物の多様化	■	■	■	■	■
健康					
蚊帳、予防接種、ビタミンA補給、駆虫	■	■	■	■	■
診療所の建設とスタッフの配属	■	■	■	■	■
専門的医療が受けられる病院	■	■	■	■	■
コミュニティ・ヘルス・ワーカー	■	■	■	■	■

教育	1	2	3	4	5
学校へのスタッフの配属	■	■	■	■	■
学校建設と教室の改修	■	■	■	■	■
学校給食	■	■	■	■	■

インフラ整備					
水と衛生	■	■	■	■	■
道路	■	■	■	■	■
送電網インフラ	■	■	■	■	■

事業発展					
マイクロファイナンス	■	■	■	■	■
協働組合を基にした事業	■	■	■	■	■

ンフラ整備、20%は教育、15%は農業と栄養、15%が浄水、衛生、環境に投資される予定になっている。

ミレニアム・ビレッジの分類

- MVsは以下のような3つの分類に分かれている。
- ① MV1は地球研究所と国連の人間の安全保障基金 (UNHSTF) が初期に設立した基軸的な村である。表1で出資元がUNHSTFと書かれている村は、日本政府がUNHSTFを通じて約20億円を出資した。このように、日本政府はMVPがスタートするための重要な役割を果たしている。
 - ② MV2はミレニアム・プロミスが資金を集めて設立した主要なビレッジ群である。
 - ③ MV3はノルウェー政府が出資しているリベリアの村、JICAが出資したモザンビーク、カメル

ン、ベナンなどの村々、米国の女優アンジェリナ・ジョリ氏が出資したカンボジアの村⁴、世界的な知的専門家集団であるKPMGが出資したタンザニア・ペンバ島の村ほか、がある。

MVsは多くの世界的な著名人によっても支援され、例えば、投機家ジョージ・ソロス氏が50万ドルの出資を約束している。また、マラウイのMV、グムリラには米国歌手のマドンナ氏、マリには米国俳優のマッド・デイモン氏がそれぞれ支援を行い、エリクソンや住友化学、トミー・ヒルフィガー財団なども主要なパートナーとなっている。

MVPとMVsの経緯は以下のミレニアム・プロミス・ジャパンのサイトを参照いただきたい。
http://millenniumpromise.jp/about/about_mp_timeline.html

2 ミレニアム・ビレッジ・プロジェクト (MVP) の現状

ミレニアム・プロミスが発表した「ミレニアム・ビレッジ・プロジェクトに関する中間報告 2010」⁵によると、MVPの成果は以下に要約される。

- ① トウモロコシの収穫量は平均で3倍増加。2歳未満の子供の慢性的な栄養失調が30%減少。
- ② 蚊帳の利用が7倍増加し、マラリア罹患率は平均で60%減少。
- ③ 子供たちの80%以上に給食を支給。その結果、出席率の増加や成績向上などの効果が表れた。
- ④ 熟練した助産師のもとで出産する女性が平均40%増加し、母子ともに病気や死亡率が減少。
- ⑤ 改善された水源へのアクセスが平均して3倍以上となり、改善された衛生施設へのアクセスが7倍近くに増加。

2010年7月の時点で、MVsの大半はフェーズ1 (設立から5年間) の最終年に入り、すべての村において大きな成果を上げている。

フェーズ2

MVPは、2011年以降のフェーズ2 (次期5年間) における新事業セットを検討中である。フェーズ2の目標は、全てのMVsが2015年までにMDGsを達成し、村人が自立しうる段階に達することである。

地球研究所は、これまで果たしてきた学識・技術面での指導的な役割を、現地人によって運営されている東・西アフリカMDGセンターとMVs現地チームに委譲しつつある。とりわけ地元の農業

協同組合を中心として事業開発戦略を練り、現地政府と密接に協力して、戦略に基づいた事業実施を目指している。

そして、これまでに築きあげた既存サービスを各国政府が円滑に引き継ぐことができるよう、地元チームと政府との間で覚書を策定しているところである。

新パートナーシップ

MVPは、既存パートナーとの関係を発展させつつ、新たなパートナーとも次々と契約を結んでいる。たとえば、国連共同エイズ計画 (UNAIDS) から、出産前後のケアや乳幼児診断システムの提供を受け、2015年までにMVs内の母子感染を予防することを目標としている。

飢餓と栄養失調を減らすため、世界食糧計画 (WFP) に対して、ウガンダのMV、ルヒーラから余剰な生産物を販売している。

また、ミレニアム・プロミスと地球研究所は、性と生殖に関する健康問題にも取り組み、MV全域内で村人が自発的に健康サービスへアクセスできるように、国連人口基金 (UNFPA) と新たなパートナーシップを結んだ。

MVPでは、フェーズ2に向けて資金調達必要性に迫られている。そのため、政府やプライベートセクター、コミュニティ、そして個人に対して、継続的なパートナーシップを呼び掛けているところである。

3 ミレニアム・プロミス・ジャパン (MPJ) の活動

MPJは、北岡伸一 (東京大学大学院法学政治学 研究科教授、元国際連合日本政府次席大使) が、TICAD IV と洞爺湖サミットの開催直前である2008年4月に、筆者とともに設立したNPO法人である。ニューヨークのNPO法人ミレニアム・プロミスとは同盟関係にあり、資金的には独立している。

- 活動の主旨は、
- ① MDGs達成のために、国内でMDGsやMVPに対する理解とアフリカ支援の重要性を訴える啓発活動を行う。
 - ② ミレニアム・ビレッジ等を通じてアフリカ諸国等への支援を行う。

③概して、内向き志向になっている日本の若者の目を世界に向けさせる。

④日本とアフリカ諸国との交流を促進する。などである。

国内におけるこれまでの主な啓発活動は、MDGsやアフリカをテーマとした研究会の開催や、駐日アフリカ大使公邸における大使講義とブッフェディナーの開催などである。また、東大生らが中心となり「MPJユース」を設立し、五月祭や駒場祭で講演会を開催するほか、毎週自主勉強会を開くなど活発な活動を続けている。今年では学生たちの関心も高まり新入生が増えて、ユースのメンバー数は約50名に達している。この活動は関西にも広がり、今春「MPJ関西ユース」が設立された。

アフリカ諸国への支援

アフリカ諸国への支援としては、以下のような活動がある。

① MVsへ学生、社会人やシニアボランティアを派遣。

モザンビークのシプト、ケニアのキスム（ミレニアム・シティ）やサウリ、ウガンダのルヒイラ、ルワンダのマヤンゲなどに学生、社会人インターン、シニアボランティアを派遣している。

②ウガンダのMV、ルヒイラにRyamiyonga小学校を建設。

この小学校は、関西のNPO法人アミティエ・スポーツクラブの年会費（小学生中心に約5000人の会員で構成）から、一人毎月100円の寄付を受ける形で建設された。MPJからは国際機関で経験豊富なシニアボランティアを派遣して、地元での交渉と契約を実施した。村の人々は、日本の小学生の厚意で学校が建設されることに感動し、彼らも約5000ドル以上の資金を提供することになった。途中、バナナの価格が10分の1に下落したため、自分たちでレンガを作って寄付してくれることとなった。

③同じくルヒイラの女児17名が寄宿舎付きの中学・高校へ進学するための支援。

女児教育支援は、筆者が15回にわたるMV

視察を通じて、取り残された最重要課題と認識したためである。サハラ砂漠以南の農村では女児たちは13、4歳になると父親の意志で結婚させられることが少なくない。これらの地域では最近まで小学校就学率が60%、中学校は25%程度で、今でも女児たちが中等教育へ進学できる可能性は少ない。概して、彼女たちの一日は水くみ、子守や家事などに追われ、学ぶ機会を奪われている。しかし、ルヒイラでは奨学制度が出来て以来、小学校卒業認定試験（PLE）という国家試験に優秀な成績（5段階中の1）で卒業する女児が続々と表れ、関係者を驚かせている。ほとんどの家には電気がないため、小学校に一年間泊り込んで試験勉強をした女児もいると聞いている。MPJでは、2010年春からインターンを現地へ派遣して、候補者の女児たちの家を一軒ずつ訪問し、本人や両親たちにインタビューを行い、中学校にも出かけて先生たちとも面接を行っている。さらに、2011年1月には現地と東京をスカイプで結び、女児たちに東京から直接質問が出来る公開インタビューを実施した。将来は村で第一号の弁護士になり村の紛争を解決したい、マラリアにかかったので医者になって村人を助けたい、中央政府のトップになり政策決定に関わりたいなど、彼女たちの夢は大きい。

④マリやセネガルの乾燥地にあるMVにおいて、日本の酪農技術を移転して乳製品の付加価値を高め、酪農家の自立支援を検討中。

今春、日本の酪農家とともに現地視察を行った。現地の農民を日本へ招聘して訓練するとともに日本の専門家を現地へ派遣して監督を行うなど、段階的に酪農環境を整え技術移転を行うための資金作りを模索している。

最近の活動と展望

MPJの最近の活動としては、2011年3月に、東京大学から奨励金を得て、「MPJユース」の学生ら12名と社会人ボランティア3名、MPJ会長、理事長らがルワンダを訪問した。学生たちはルワンダ国立大学の学生と現地で国際学生会議を開催する

と同時に、東京側では残った学生たちが韓国の大學生を招いて、インターネットを通じて会議に参加した。一方、学生視察団は、ルワンダ滞在中、中央銀行総裁と面談、大統領府、外務省や日本大使館を訪問、ルワンダのMVであるマヤンゲ、虐殺記念館などを視察して、非常に有意義な体験を得ることができた⁶。彼らは、とりわけ、ビレッジを訪れ村人の実際の生活に触れ、交流できたことが印象的だったと話している。

また、MPJでは要請に従い、教育機関へ出向いてアフリカの人々の生活等について紹介している。特記すべきは、2009年夏に気仙沼中学校へ出かけて全校生徒に向けて、モザンビークの村における水も電気もない生活体験を語ったことである。その際、全生徒から心に沁みるような内容の感想文を受け取っている。気仙沼中学校の学園祭で集められた文房具を持参して、ルワンダの子供達へ届けて帰国したところに東日本大震災が起こった。気仙沼の関係者によると、当時中学生だった彼らはアフリカの厳しい現状についての話を聞き、大震災という試練を乗り越えるための心理的土壌ができたのではないか、ということであった。そのため、MPJでは、今年から「MPJユース」のメンバーとともに全国の小・中学校を訪問して、「心の豊かさ」などについて、映像を紹介しながら子供たちと会話する活動を始めることにしている。

さらに、今年ではビジネスマンを対象として、グ



Pray For Japanのメッセージ（セネガルのミレニアム・ビレッジ、ポトゥー村から）

ローバルな課題とアフリカに関する「リーダーシッププログラム」（仮称）を開始する予定である。アフリカは資源が豊かで中国、韓国ほか先進諸国が競って投資を行い、ビジネスチャンスが大きい大陸である。日本企業の進出の遅れが懸念されているが、最近では企業の関心も高まりつつある。

東日本大震災という大危機に直面し復興が危惧される現在、日本国内でアフリカ支援についての理解を得ることは容易ではない。しかし、これまで支援してきたMVの村人からは“Pray for Japan”の写真やメッセージが次々と到着した⁷。世界からの支援を受けて、被災地の方々も感じられているように「世界はひとつ」と実感させられている。このようにMPJでは他国への支援は日本と日本人のためにも役立っていると信じ、微力ながら日々の活動を続けている。

【注】

1 <http://millenniumpromise.sblo.jp/article/41102342.html#more>

（潘基文国連事務総長の開会宣言の邦訳—MPJのホームページより）

2 MVPは、コロンビア大学地球研究所、ニューヨークのNPO法人ミレニアム・プロミス、国連開発計画（UNDP）の3者が、それぞれ順に、コンセプトと学識者・技術者を提供、ファンド・レイジング、現地への人材派遣（現地人を採用）という役割分担を担うパートナーシップにより運営されている。2011年6月末、UNDPはその役割を終了する予定。

3 『貧困の終焉』（ジェフリー・サックス著、2006年早川書房）P.304

4 アフリカ以外の国にもミレニアム・ビレッジが設立されている。

5 http://millenniumpromis.sakura.ne.jp/sblo_files/millenniumpromise/image/midyearreportdraft0223EFBC88E69C80E383BBE69C80E7B582E78988EFBC89-075e1.pdf

（MPJのホームページ上に「MVP中間報告2010」の邦訳を掲載している）

6 現地でのアポイントを取るにあたって、駐日ルワンダ大使のムニャカジ・ジュール閣下（当時）、駐ルワンダ日本大使の畑中邦夫閣下には非常にお世話になった。

7 <http://millenniumpromise.sblo.jp/article/43983613.html>

（アフリカのMVからのメッセージを臨時ニュースレターにまとめ、MPJのホームページ上に掲載している）

【参考資料】

『貧困の終焉』（ジェフリー・サックス著、早川書房 2006年）

『地球全体を幸せにする経済学』（ジェフリー・サックス著、早川書房 2009年）ほか